

## 原田 泰教（インド哲学史）

### ハリバドラ・スーリ著『非絶対論入門』研究

八世紀インドのハリバドラ・スーリ著『非絶対論入門』は、「非絶対論」というジャイナ教独自の哲学の解明のための重要な資料とされながらも、その難解さの故に研究が遅れていた。

過去の多くのジャイナ教研究者が「非絶対論」の思想を論じながらもその解釈がまちまちであったのは、根拠資料の提示が十分になされていないことに起因する。原田泰教氏が著名な学僧ハリバドラによる一つの基本的なテキストを根拠資料として、それに基づいてジャイナ教の「非絶対論」の思想を解明したことは、学界への貢献である。

氏はテキストの内容を十分に踏まえた上で、「非絶対論」の原語であるアネーカーンタヴァーダに対して「非絶対論」という新しい訳語を提示し、「積極的多面説」等の従来の訳語に疑問を呈した。思想に即した訳語の再検討をなした点で、評価できる。

また氏は『非絶対論入門』に引用される文献の典拠を網羅的に追跡・収集し、ハリバドラに先行する他学派の論師達を特定することで、彼の相対年代を特定しようとした。未だ十分に知られていないインド思想史を飾る著名な学僧たちの前後関係を考察するための資料を追加した点で、評価できる。

また氏はハリバドラの論敵の中心人物として、仏教認識論・論理学派のダルマキールティが想定されていることを発見し、著作の目的のひとつがダルマキールティ説の論駁であったことを確認した。そのことは、ダルマキールティがインド思想史上に与えた影響の大きさを再確認させるものである。

また氏はハリバドラの輪廻観の記述を調べ、解脱の観念とジャイナ教独自の「非絶対論」との結びつきを明らかにした。ジャイナ教独自の思想もインド人の伝統的な解脱観と矛盾なく合致している。本来は同一の思想とみなされるほど教理が似通っていた仏教とジャイナ教がこの「論理学期」の時代に至って激しく思想的に対立した、その主張の相違点が判明した。

氏はサンスクリット語のテキストの校訂を行った。その校訂作業においては、従来の出版本の他にインドの紙写本 2 本、並行テキストである同じハリバドラの『非絶対論の勝利の旗』、およびその注釈が参照された。信頼の置けるテキストを学界に提示した点で、評価できる。

またテキストの全訳を行った。出来る限り原文に忠実な翻訳がなされた。グジャラーティー語以外での世界で最初の近代語への翻訳である。初訳には多少の誤訳がつきものであり、本訳も作品の難解さの故に、完全に誤訳を免れているとはいえないであろうが、しかしこの最初の試みは今後の研究のたたき台となるものである。

また氏は作品全体の詳細なシノプシスを作成し、内容を容易に概観できるようにした。このシノプシスは議論全体を知らずには作成できないものであり、今後の「非絶対論」研究に大いに役立つものである。

問題点としては、インドに散在する写本のうち、二本しか使用していない点である。今後も写本収集の努力がなされるべきである。また、翻訳に関していえば、複雑な議論の微妙な文脈が、隅々まで完璧に理解されたとは言いがたい。ジャイナ教の他の文献との連絡もまだ不十分である。しかしながら、氏の『非絶対論入門』研究は研究が遅れていた論理学期のジャイナ教哲学史の本格的な研究の一つとして、今後の研究の礎石となるものである。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。